

研究所だより

編集・発行

千葉県長生地方教育研究所
茂原市東郷2300-1TEL 0475(24)9721・FAX 0475(23)4820
H P <http://www.choseikaikan.or.jp/>
メール kenkyujo@beach.ocn.ne.jp

「主体的・対話的で深い学び」 実現の一助として

千葉県教育庁東上総教育事務所 指導主事 岩澤 滋

1 はじめに

本年度5月から指導室計画訪問の機会を頂き、多くの小・中学校を訪問させて頂きました。各小・中学校ともに新学習指導要領の移行期に当たり「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、授業改善を意識した数多くの実践が行われていました。先生方の意識の高さと授業改善に向けたまさに『主体的』な姿は、それぞれの現場で抱える課題に果敢に立ち向かう姿と重なり頼もしさをも感じるものでした。ここでは授業改善を以下の2つの面から考えてみたいと思います。

2 新学習指導要領の理念から

「超スマート社会」「人生100年時代」は今日我が国の科学技術の目まぐるしい進歩や少子高齢化といった現状を表すキーワードです。これらに対する教育の姿として今回の学習指導要領の改訂では「社会に開かれた教育課程」を目指しています。その背景には、教育が普遍的にめざす根幹を堅持しつつも社会の変化を柔軟に受け止めていくといったこれまで以上に間口を広げた姿勢を教育の現場にも明確に反映させていくことが示されています。これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力の育成を、いかに今回の改訂により実現していくのが求められているのです。

これを踏まえ、これからの学校教育には「主体的・対話的で深い学び」をとおして創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開し子供一人一人に「生きる力」を確実に育むことが重要となります。そこには基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を基盤に「思考力・判断力・表現力の育成」「主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度」などが求められています。もちろん「知」だけでなく「徳」としての道徳教育、「体」の体育・健康に関する指導の充実とも言ってもありません。

そこで実現のためのキーワードがすべての教職員による「カリキュラムマネジメント」となります。

「カリキュラムマネジメント」とは子供たちや地域の実情を踏まえて学校教育目標実現のために教育課程を編成していくことですが、そこに①教科等横断的要素②PDCAサイクルの確立③人的、物的資源の活用を踏まえ学校全体で取り組んでいくことが求められているのです。

3 計画訪問における授業参観から

学習計画を思案したり、学習指導案を作成したりすると1単位時間内にたくさんの活動を詰め込んでしまうことはよくあることで、これによって学習のまとめにたどり着かないといった経験もあるかと思いますが、学習指導要領総則には、主体的・対話的で深い学びは、「必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現するものではなく・・・」とあります。つまり単元や題材などの内容や時間のまとまりを見通して、長いスパンで単元を見渡し構築するものであるということになります。

問題解決的な学習を基盤とする「主体的・対話的で深い学び」は、過程として個の思考から始まり「ペア」「グループ」などの形態を経ることもありますが、最終的に「個における自らの意見が確立(+表明)されているか」が重要となります。その実現のための基本(あるいは前提)は以下のとおりです。

- ① (子供たちは) 活動内容に見通しをもち、学習の目的や段階を理解しているか
- ② 思考・判断のために十分な情報の提示・提供がされているか
- ③ 思考・判断のために適切で十分な時間が確保されているか

①まず、子供たちには「これからどんな学習が行われるのか」「今何が行われていて何をすべきなのか」を認識させることが大切です。教師は子供たちの実態と学習過程に合わせ明確な発問や提示を行っています。しかし、伝わっていないとわかれば何度も繰り返し、加えて机間指導をしながらもう一度説明を行います。伝えることは非常に大切なことでありますが、これを最小限に済ませることが③に述べるように「主体的」な姿に繋がります。学習規律を高めたりICT機器(電子黒板や大型モニター)を活用したりすることで解決を図ることも大切です。

②次に、話し合いや情報交換の際にはそれ相応の情報(ネタ)を調べ学習によって個人が見出しているか、またはペアやグループによる情報の共有、そして教師からの的確な内容による情報の提示(子供たちの情報源では十分ではないものや話し合いに揺さぶりをかけるのに十分な内容)が必要になります。「主体的・対話的で深い学び」にとって子供たちの基礎・基本となる知識やスキルの習得はその前提となります。この際に注意したいのは、提示の時期です。これについては、子供たちの実態や教材の内容等によって異なり、十分な検討が必要になると思います。

③最後に、「適切で十分な時間」です。タイマーを使って「〇〇分まで」と刻んで集中力を高める方法も多く見られますし、1単位時間の流れが確立されていて決められた時間の中で個の意見がきちんとまとまる実践もありました。しかし、個の思考や学び合いの途中に時間不足から打ち切らざるを得ない、個の意見に深まりを見せないまま終了する場合も多いのではないのでしょうか。導入や授業の流れの確認を速やかに行い、思考・判断の時間の確保を図ることが重要になってくると思います。

4 最後に(「教師の言葉の力」について)

子供たちが自らの意見や考えをまとめる手がかりとして、話し合いに必要な情報と同時に教師の言葉が子供の意見に価値を与え発表までの「自信」に繋がる力は計り知れないものがあると思います。発表や何気ない呟き、ノートについても子供たちは教師の一言を待っています。是非子供たちに生きた言葉を伝え、時に受け止め子供たちの「生きる力」の向上を目指してほしいと思います。



「確かな学力」を身に付けた生徒の育成 ～実感を伴う「わかる授業」の確立を通して～ 長生村立長生中学校

1 はじめに

本校は、平成28年度から3年間にわたり千葉県教育委員会から「学力・学習状況」検証事業の協力校としての指定を受け、学力向上に向けて取り組んできた。変化の激しい時代を生き抜くうえで必要となる人生を拓く「確かな学力」を培うため、「授業力の向上」を土台とし、実感を伴う「わかる授業」づくりを目指し、どのように「主体的な学習態度」の育成を図るかという視点を大切にしながら、本校研究主題に迫っていきたいと考えた。加えて、家庭学習による学習の習慣化、長生村保小中一貫教育の推進を図っている。

2 研究目標

生徒が、できる喜びや創る喜びを実感できる「わかる授業」の追究を通して主体的な学びへと発展させていくことで、「確かな学力」を身に付けた生徒の育成のための手立てを、実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

生徒のできる喜びや創る喜びを実感できる「わかる授業」を目指して、授業を改善・工夫していけば、学力や学習意欲が向上し、主体的な学習態度や家庭学習の習慣化につながり、「確かな学力」を身に付けた生徒を育成できるであろう。

4 研究内容

- (1) 「授業力の向上」に向けた取り組み
- (2) 「主体的な学習態度」の育成を目指した活動、指導方法・指導体制について
- (3) 家庭学習の習慣化に向けた取り組み
- (4) 長生村保小中一貫教育の推進について

5 研究の実際

- (1) 「授業力の向上」に向けた取り組み

①相互授業参観

互いに授業を参観し、授業改善につなげていく相互授業参観に取り組んでいる。月に1回以上、他の教員の授業を参観し、実感を伴う「わかる授業」づくりの視点から「参考になったこと・工夫していること」、「改善すると良いと思われること」を「相互授業参観カード」に書き、意見交換をしている。自分の教科だけでなく、他教科の授業を参観することで、発問や板書の仕方、教材・教具や資料の活用の仕方等を学び、自分の授業に活かそうとする姿が見えてきた。また、他教科での生徒の姿を参観することで、生徒理解も深まり、授業の改善・工夫へとつながってきた。

②学期ごとの授業評価

授業のより良い姿を求め、生徒による授業評価を学期ごとに実施している。項目は、全教科共通で生徒自身の授業への準備・取り組みと教科の研究計画に沿った内容となっている。各教科で結果を分析し、授業改善に取り組んでいる。校内研修で各教科の結果や課題を共有し、職員全体で改善に向けての取り組みを進めた。

③授業研究

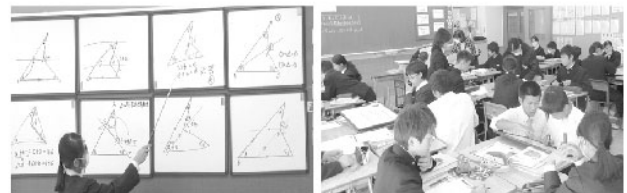
実感を伴う「わかる授業」を各教科でどのように考え、どのような手立てを用いて実践していくのかを教科部会で検討を重ねた。そして、授業研究の土台となる学習指導案作成においても、研修を重ね、東上総教育事務所指導室にも協力をいただき、授業力の向上に努めた。学習指導案に実感を伴う「わかる授業」づくりについて具体的に記載し、展開にも、その手立てを明記し、授業改善に取り組んでいる。

加えて、県の「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラムを授業改善の1つの視点として取り入れている。4つの学習プロセスの中で、全教科で、「見出す」「まとめあげる」の学習プロセスでは、小中連携ユニバーサルデザインによる学習課題・問題、まとめの提示、「調べる」「深める」の学習プロセスでは、タイマー、ホワイトボード、ネームプレートなどの教具を用いて、学び合う場面を設定したり、タブレットやデジタル投影機などのICT機器を活用したり、「まとめあげる」の学習プロセスでは、「振り返り」を取り入れ、授業改善に取り組んできた。

- (2) 「主体的な学習態度」の育成を目指した活動、指導方法・指導体制について

①「学び合い」活動

自分の考えや情報を伝え合い、学び合うことで、様々な考えや情報を自分の中で整理し、考えを広げ深めることで、主体的に学びに向かう態度を培いたいと考える。各教科で、「学び合い」のねらいを明確にし、「自分で考え」「全体で共有し」「思考を整理し深める」活動を取り入れ、ねらいに沿った「学び合い」を目指した。個別・ペア・グループなど学習形態を工夫し、思考ツールやホワイトボード・タブレットなど学び合うための手立てを取り入れ、実践を積み重ねた。



ホワイトボードを活用した授業

②授業の「振り返り」の実施

自己評価カードを活用した「振り返り」を全教科で毎時間実施している。形式については、各教科で、より良いものを目指して取り組んでいるが、自分の言葉で書く形式を共通で実施している。生徒は学習した内容、新たな気づき、疑問点、さらに深く学びたいこと等を書くことで、個々に学習のまとめをする。毎時間の「振り返り」から、少しずつ家庭学習に結びつく姿も見られるようになってきた。また、教師側も、生徒の

学びの姿を毎時間、確認することができ、次の指導へ生かすことができた。

③基礎的・基本的な知識・技能の習得に向けた個に応じた指導

ア 加配教員、学習指導支援員・特別支援教育介助員の有効活用

英語科に、加配教員1名、村派遣の学習指導支援員1名、ALT1名、数学科に、加配教員1名、村派遣の学習指導支援員2名があり、全学年の英語科・数学科の授業はすべてチームティーチングで行われ、毎時間2名から3名体制での授業となる。T2・学習指導支援員は特に、下位生徒への個別指導・支援を重点的に行う。また、単元・学習内容により、チームティーチングによる一斉指導の中に、部分的に少人数指導を取り入れた実践も行う。さらに、全学級でスクリーニングを実施し、特別に支援が必要な生徒については、技能教科や実習を伴う教科を中心に、村派遣の特別支援教育介助員2名が、個に応じた支援を行っている。



チームティーチングの様子

イ 学習相談、パワーアップセミナー等

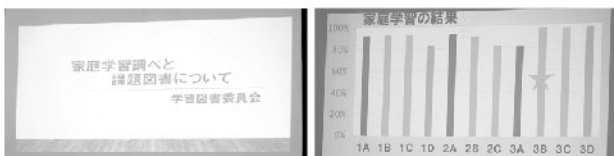
学習指導支援員による下位生徒への個別指導として、英語科と数学科では、昼休みなどを使っての個別の学習相談、夏季休業中の学習相談が行われている。また、パワーアップセミナー（夏季補充学習）が各学年5教科で行われる。このような個に応じた指導を継続して行うことで、下位生徒でも意欲を失うことなく自分で学習に取り組む姿が見られた。



昼休みの個別指導・夏季休業中のパワーアップセミナー

(3) 家庭学習の習慣の確立への取り組み

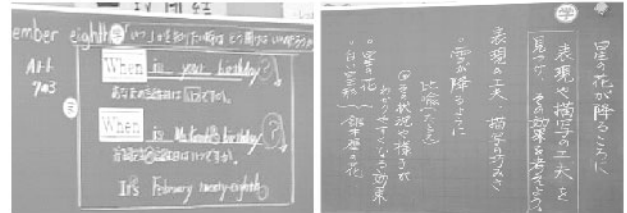
家庭学習ノートを活用した点検を毎日行い、家庭学習の習慣化を図った。また、生徒の委員会活動による呼びかけや点検活動、家庭学習時間調査の実施、そして、定期テスト前にはテスト計画表を配付し、計画的な学習を促している。加えて、長生村教育研究協議会で作成した「家庭学習の手引き」を活用し、家庭学習時間や学習の仕方についても各教科で具体的にサポートし、家庭との連携を図った。



生徒集会での発表

(4) 長生村保小中一貫教育の推進

小中連携ユニバーサルデザインを取り入れた板書のルールでの指導に取り組み、実践している。板書のルールが全教科で統一されることで、授業での学習内容が理解しやすくなり、ノートにもまとめやすくなっている。小学校時からのユニバーサルデザインを取り入れた板書での継続した指導もあり、スムーズに中学校の授業へ接続できている。



ユニバーサルデザインによる板書例

また、保小中一貫教育での「長生村で育てたい力」を受けて、各教科での「育てたい力」を明確にした連続性のある年間指導計画を作成し、「小中の段差なき教育」の実践、中1ギャップの解消に取り組んでいる。

数	長生村で育てたい力	・基礎的な計算力及び表現力
	本校で育てたい力	・基礎的・基本的な計算力と主体的に学習に取り組む態度
学	「わかる授業」づくりの手立て	・毎時間の授業で、基礎の計算練習を繰り返し行う。また、授業後に振り返りシートを記入させることで、基礎的・基本的な知識・技能が身についているか確認する。
科		・授業の中で、自力解決の場面を設定し、ペア学習・グループ学習などの伝え合

「長生村で育てたい力」 ⇒ 「本校で育てたい力」

そして、小学校で培われた資質・能力を基に、本校生徒の実態を踏まえ、「確かな学力」の向上につながる実践に日々取り組んでいる。

また、保小中の交流を通して、保小中一貫教育を推進したり、長生村教育研究協議会で、小・中9年間での学びの中で重点をおく指導内容等を各教科で検討したりして、保小中一貫教育の推進に向けて取り組んでいる。

6 最後に

「確かな学力」を身に付けた生徒の育成を目指し、実感を伴う「わかる授業」づくりに焦点を当て、研究を進めてきた。その中で、「授業力の向上」が全ての土台になること、併せて、「主体的な学習態度」の育成を図るための様々な活動、指導方法・指導体制を改善・工夫するためにも基礎的・基本的な知識・技能の習得が必要不可欠であると再認識することができた。加えて、学校全体で一つの方向に向かい、全職員で研究にアプローチしていく姿勢、一つ一つの実践を着実に積み重ねていくことの大切さを強く感じた。

(文責 片岡 啓子)



「確かな学力の向上をめざし、主体的に学ぶ児童の育成」

～思考力・表現力を高める授業づくりを通して～

横芝光町立東陽小学校

1 はじめに

本校は、平成28年度から横芝光町教育委員会より3年間の「学力向上推進校」と千葉県教育委員会から「ちばっ子『学力向上』総合プラン」事業に基づいた「『学力・学習状況』検証事業」の研究協力校の2つの指定を受けた。これにより、学力向上に向けた授業改善を図る組織的・実践的研究の足がかりを得ることができた。学力向上に対する研究主題を「確かな学力の向上をめざし、主体的に学ぶ児童の育成」として、国語科と算数科を研究教科として取り組んできた。東上総教育事務所の指導主事の先生方には何度も要請訪問をお願いし、御指導していただいた。その中身の濃い研修の時間を過ごしていくにつれて、職員の授業に対する自信が高まっていったと感じる。その研修の時間で培った研究実践について紹介していきたい。

2 研究目標

児童が主体的に学び、確かな学力を向上させるための授業改善の在り方について、授業実践を通して明らかにする。

3 研究仮説

国語科と算数科の学習において、「見出す場」「調べる場」「深める場」「まとめあげる場」の充実を図れば、基礎・基本が身につく、自分の考えを進んで書いたり話したりすることができるだろう。

4 研究実践

(1) 授業改善

- ・「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラム（県の施策）を活用し、本校の学習プロセスに構成
- ・算数科における少人数、T.Tによる取組

東陽小学校 学びのプロセス

見出す	調べる	深める	まとめあげる
<p>【主体的に学ぶ児童の姿】 自ら問題（問い）をもとめ、見出しを立てて取り組む児童 ＜授業改善の取組＞ ○学習のゴールを明確にし、学習計画を立てる。 ○児童が読んだ本や学んだことを話し合い、自分の学びを発表する。</p>	<p>【主体的に学ぶ児童の姿】 疑問や新しい学習活動や情報等を活用して、自ら考え、思いや考えを表現したりすることが出来る児童 ＜授業改善の取組＞ ○教材本文体から視点をもって読み取る。 ○「見出す」「調べる」「深める」「まとめあげる」の学習過程を授業で実践する。</p>	<p>【主体的に学ぶ児童の姿】 自分の考えを深めたり、整理を促されたりする児童 ＜授業改善の取組＞ ○児童が読んだ本や学んだことを話し合い、自分の学びを発表する。 ○「見出す」「調べる」「深める」「まとめあげる」の学習過程を授業で実践する。</p>	<p>【主体的に学ぶ児童の姿】 自分の考えを深めたり、整理を促されたりする児童 ＜授業改善の取組＞ ○児童が読んだ本や学んだことを話し合い、自分の学びを発表する。 ○「見出す」「調べる」「深める」「まとめあげる」の学習過程を授業で実践する。</p>

※国語科においては、単元全体を通して「見出す」「調べる」「深める」「まとめあげる」の学習過程を設定する。（第1次：見出す 第2次：調べる・深める 第3次：まとめあげる）

(2) 基礎学力の定着

- 朝の活動15分の内容を統一
 - ・火曜に算数のちばっ子チャレンジ100
 - ・木曜に国語のちばっ子チャレンジ100
 （月・水曜は、読書タイム）取組が明確になったことから、計画的に進められ、基礎学力の向上につながった。
- 本校の課題（書く力）解決のための取組
 - ・視写チャレンジ（月始め、月末）5分間で何文字書けたのかを記録した。
 - ・学校・学年行事の感想

無答や文章への抵抗感の減少、書くことに慣れて書く力の向上につながった。また、廊下や教室内にめくって見られるよう掲示し今までの積み重ねがわかるようにした。

(3) 家庭における学習の習慣化

- 全校共通理解の家庭学習の取組
 - ・音読カード、家庭学習カード（毎日記載）
 - ・家庭学習（自学）ノートの推奨
- 家庭との連携
 - ・横芝光町「家庭学習の手引き」の配付
 - ・学習便りの配付
 家庭学習に関する学校・学年の方針や取組を家庭に伝え、保護者の理解や協力を得ること・連携を図ることを目的とした「学習便り」を保護者へ学年ごとに発行した。児童が間違いやすい問題の解き方や自学の取組が素晴らしいノートの紹介をするなどし、保護者の学習に対する関心を高めた。
- 生活習慣の改善
 - ・いきいき東陽っ子元気アップ作戦
 学力向上の基礎となる生活習慣の改善を保護者へ集計結果を配付して伝える。
- 小中一貫の生活・学習規律
 - ・9年間を通して生活・学習のルールの設定



自分の考えを書く(調べるの場)



自学ノートの掲示(毎月各クラスから2名選出)



自分の考えを話す(深めるの場)



いきいき東陽っ子の記録用紙



職員室前の廊下に学年ごとに印刷してある



視写チャレンジ 学習便り(間違いやすい漢字について)

5 おわりに

児童の学力向上を目指すためにはどうすべきなのか。児童に「わかった」「勉強って面白い」と意欲をもって学習に取り組んでもらえるような学校にするにはどうすればよいのか。まだ、道半ばであるが今までの取組について書かせていただいた。これから目標に向かって、職員一同、研鑽を積んでいきたいと考える。

(文責 行木 裕透)



「学力・学習状況」検証事業における取組 大多喜町立大多喜中学校

1 はじめに

本校は、平成28年度より、「学力・学習状況」検証事業協力校として、学力向上を主題として研究に取り組んでいる。全国学力・学習状況調査のデータを経年分析し、本校生徒の実態と課題をつかみ、「ちばっ子『学力向上』総合プラン」等の事業を活用して、朝自習の取組の工夫や、授業改善等の実践を行っている。

2 研究主題

学力を向上させるための指導方法の工夫・改善
～主体的な学びを目指して～

3 研究のねらい

自分の考えを持ち、仲間に伝えようとする力を育てることで、自ら進んで学習に取り組む姿勢を養うことができると考え、研究実践に取り組んだ。

4 研究内容

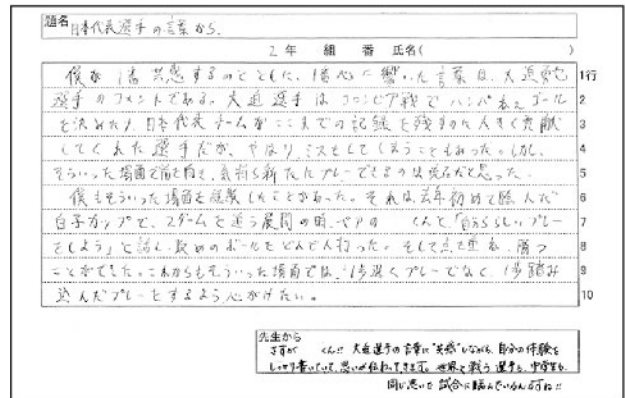
- (1) 学校独自の取組『サク作タイム』
 - ・全校で作文活動に取り組む朝自習の工夫
- (2) 授業改善に関わる取組
 - ・ホワイトボードを用いたペア・グループ学習
 - ・「学習課題」「ポイント」「まとめ」等を明示する黒板掲示の工夫
- (3) 「ちばっ子『学力向上』総合プラン」の活用
 - ・学習サポーターによる、数学等におけるチーム・ティーチング
 - ・『家庭学習のすすめ』リーフレットの保護者への配布と周知
 - ・『ちばのやる気学習ガイド』を活用する「学力ジャンプアップ月間」の設定

5 研究実践

- (1) 『サク作タイム』の取組

隔週の朝自習の時間、テーマに沿った短作文を全校で書く活動である。以下の4点に特に留意して活動を行っている。

 - ① 朝自習の15分以内で書く。書き終わらなくてもよい。
 - ② 書いた作品について、全職員でコメントを記入する。文章の訂正や、否定的な朱書きなどは行わず、生徒の思いを肯定的に受け止める。
 - ③ 作品は生徒個人のポートフォリオに積み重ね、時に応じて掲示し、生徒が互いに読み合えるようにする。
 - ④ テーマの設定については、生徒が自分の考えを書きたいと思うような題材を選ぶ。



【生徒作品】

『サク作タイム』の活動について、生徒は肯定的な感想を述べている。

- ・「自分の心の中にしまっていた思いや考えを、サク作タイムで出すことができたので、続けてほしい。(3学年男子)」
- ・「何回かやるにつれ、文章ですらすら自分の思ったことを書けるようになってきて、作文を書くのが楽しくなった。(2学年女子)」

平成30年度の全国学力・学習状況調査では、「理科の問題で、文章の解答について最後まで書こうと努力した」と回答した生徒は、57.1%であり、平成27年度の40.1%から大きく向上している。自分の考えを短時間でまとめ、表現する力が育っていると考えられる。

- (2) ホワイトボードを用いたペア・グループ学習

全学年にB4、A3サイズのホワイトボードを各6枚ずつ配付した。書くことで自分の意見をまとめ、発表しやすくなるように、グループ活動の際に活用している。また、チーム・ティーチングで、個別に支援する際にも、ホワイトボードを用いた説明を行っている。



サク作タイムの取組

ホワイトボードの活用

6 おわりに

全国学力・学習状況調査の経年比較において、「自分にはよいところがある」という質問に「あてはまる」と回答した生徒は平成27年度の10.8%から、平成30年度には44.3%と大幅に向上している。自分の考えを述べ、伝えることが自己肯定感の育成にもつながっていると考えられる。それを踏まえ、今後の課題として、生徒が主体的に取り組むことのできる学習内容および学習方法の検討が必要である。

(文責 玉田 あや)

第5回 サク作タイム 2018/7/3,4

みなさん、ワールド大会は見ていますか？TV放送は素晴らしいので、良い子の皆さんは、ぐっすり寝ている間に『よくがんばり』という人々多しからんが、今回は、自分の日本代表選手のコラージュを撮り、文章を書いて下さい。

★テーマ(全校共通課題)★
「日本代表選手の中から、最もあなたの心に響いた方を選び、なぜその言葉を志すのか理由を書きなさい。その際、自分の具体的な体験をできるだけ述べてください」

大迫勇也 選手
【世界大会で、アテンドを外した後の言葉】
「チャンスは決まんなさらないし、悔しいと勘別ですけど、奥にだけじゃなく相手も外している。そこで、メンタル的に折れる方がダメなことであって、折れなかったことを感謝の上でチャレンジするしかないと思っていて。そこはもう続けて続けて前を向いてやらしかたないです」

テーマ例
『W杯代表選手の言葉から考える』(抜粋)



「学力向上」に向けた取り組みについて

～家庭学習のすすめ～

『豊かな心と確かな学力を身につけた生徒の育成』

茂原市立茂原中学校

1 はじめに

本校は、「未来を展望する創造的な知性と、たくましい体力を持った心豊かな生徒の育成」を教育目標に掲げ、「チーム茂中」を合言葉に、「**友**だち同士、心の通う楽しい学校」「**学**わかる喜び、学びの学校」「**感**感動あふれる、生き生きとした学校」を目指し、日々の実践にあたっている。そして、「学習の基本は授業である」ことを念頭に「主体的・対話的で深い学び」を推進した授業を進める中で授業力を向上させ、「道徳教育」や「キャリア教育」を充実させること、学習の基盤は日々の学級・学年・集団での豊かな人間関係づくりの上に成り立つものであることの重要性を認識し、1単位時間の学習の充実を図ることにより、「豊かな心と確かな学力を身につけた生徒の育成」を目指している。

2 「確かな学力」「豊かな心」と「《X》の取り組み」

「確かな学力」を、「知識・技能の定着にとどまらず、自分の学びたいことに主体的に取り組み、学習した力を積極的に実生活に生かそうとする態度のこと」ととらえ、「豊かな心（自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心）」を育み、「確かな学力」を身につけた生徒を育成するために、「《X》の取り組み」を行うこととした。

- 《Ⅰ》「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、「授業づくりのグランドデザイン」を取り入れ、授業力の向上を図る。
- 《Ⅱ》「授業のユニバーサルデザイン化」による、明確な授業を展開する。
- 《Ⅲ》「ポイント授業参観」、「授業の自己評価」により指導力の向上を図る。
- 《Ⅳ》「ステップアップ学習の手引き」の活用による学習習慣の確立を図る。
- 《Ⅴ》「家庭学習Step Upカード」の活用による家庭学習の習慣化を図る。
- 《Ⅵ》「学習相談・セミナー」の開催により、補習体制を充実させる。
- 《Ⅶ》「学校連携・地域連携」により、専門性豊かな授業や体験を展開する。
- 《Ⅷ》「キャリア教育の充実」による自己の生き方や進路を考える指導を工夫改善する。
- 《Ⅸ》「道徳教育の充実」を図り、豊かな心を育成する。
- 《Ⅹ》「豊かな人間性や社会性の育成」を図り、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」に関わる資質・能力を育成する。

3 家庭学習を中心とした生徒の主体的な学び

「豊かな心と確かな学力」を身につけた生徒を育成するために、「授業力の向上」に重点を置き、《X》の取り組みを意識しながら、「指導力の土台づくり（授業力の深化）」である授業力の向上と、「学習の土台づくり

（主体的な学び）」である学習習慣の確立の2本柱で進めている。生徒の主体的な学びを支援するために「ステップアップ学習の手引き」を活用し、オリエンテーションを実施して授業や家庭学習に対する姿勢について説明し、手引きを用いて定期テスト後に各自の取り組みを振り返る機会を設定している。また、保護者に協力を仰ぎ、生徒の家庭での取り組み状況を記載していただいている。さらに「家庭学習Step Upカード」により、家庭での学習環境、家庭学習の習慣化、翌日の授業に対する姿勢を定期的に確認していくことで、学習習慣の確立、主体的な学びとなるように土台を築いている。

ステップアップ学習の手引き	
指導力の土台づくり 授業力の向上(授業力の深化)	学習の土台づくり 学習習慣の確立(主体的な学び)
<ul style="list-style-type: none"> ○学び方を支援する。 ○各教科の観点を基に評価し、生徒を支援する。 ○授業評価で指導法を改善する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○授業や家庭学習に対する姿勢を学ぶ。 ○自己評価を行い、学び方を改善する。
《手引きの内容》 <ul style="list-style-type: none"> ・授業について（受け方、流れ、ノートづくり） ・授業と家庭学習 ・自主学習ノート ・テストの受け方 ・各教科の学習の仕方（授業、家庭学習、テスト） ・各教科の学習内容や評価の仕方 ・学習の振り返り（自己評価、保護者から） 	

家庭学習Step Upカード
<ul style="list-style-type: none"> ○自分の学びを改善し、自らの課題に目を向けて学習に取り組む生徒を育成する。 ○カードを活用することで、家庭での学習習慣を身につける手立てとする。 ○定期テスト期間ではない時期に1週間連続して調査し、家庭での学習習慣の変容を追い、支援の手立てとする。 ○賞賛シールの貼付、家庭学習表彰の実施、学年報告会で家庭に家庭学習状況を知らせる。
《調査内容》 <ul style="list-style-type: none"> ・目標時間 ・学習環境 ・学習時間 ・学習の準備 ・自己評価

4 おわりに

学力向上のためには、教師の授業力の向上はもちろん、生徒自身が価値を見出すこと、保護者の協力が必要である。教師、生徒、保護者が一体となり、生徒への意識付けをし、達成感、成就感を味わわせることがとても重要である。

(文責 吉森 尚子)



「読書」に親しむ児童の育成 ～学校図書館の利活用と図書館司書との連携を通して～ 山武市立日向小学校

1 はじめに

平成29年に告示された新学習指導要領、総則編、第2章、第3節(7)学校図書館、地域の公共施設の利活用の中で、「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、児童の自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実すること。」と学校図書館が学校教育において欠くことのできない設備であることが明示された。それは、学校図書館が学校における言語活動や探究活動の場となり、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善への役割が一層期待されるからである。本校では、学校図書館をさらに活性化させ、各教科を横断的に捉えられるようにするためにはどのようにしたら良いか、また、図書支援員、図書館司書とどのように連携していけば良いかなど、学校図書館の役割を探っていくことを研究の柱として取り組んでいる。

2 研究目標

- 学校図書館や外部人材の授業での活用の仕方を探る。
- 児童が進んで学校図書館を利活用する取り組みの工夫を探る。

3 研究仮説

- 学校図書館の特徴的な機能、外部人材の専門性を授業に生かせば、読書に対する意欲が高まるであろう。
- 学校図書館の読書環境を充実させれば、読書に対する意欲が高まるであろう。

4 研究の内容

- 学校図書館の特徴的な機能である、児童の読書活動や読書指導の場である「読書センター」としての機能、児童の学習活動を支援し、授業の理解を深める「学習センター」としての機能、児童の情報の収集・選択・活用能力を育成する「情報センター」としての機能を生かす。
- 図書館司書などの外部人材と連携した授業を実践する。
- 児童が読書に親しめるような学校図書館の読書環境を整える。

5 研究実践

学年：4年

単元名：物語の世界を想像して、音読したり、えんじたりしよう「ぞろぞろ」

研究仮説に迫るための手立て：

- ①単元の指導計画の第一次において図書館司書から落語の歴史やいろいろな落語について紹介してもらうことにより、落語に初めて出会う児童だけでなく全ての児童が読書の幅を広げ読書に対する意欲が高まる。
- ②単元の指導計画の第二次において、図書館司書から落語の読み方についてアドバイスをもらうこと

によって、児童が意欲を持って学習に取り組めるようにし、読書に対する意欲が高まる。

- ③単元の指導計画の第一・三次において、図書館から落語のDVDを選び、視聴させることによって、児童が壱家の落語に触れることになり、落語の本を読むことへの意欲が高まる。

≪図書館司書から落語の歴史やいろいろな落語について紹介してもらう児童≫



落語は「落ち話」とも言うんです。

≪図書館司書からアドバイスを受けながら落語を練習する児童≫



動きを入れて読んでみたらどう？

決まった読み方はないんだから大丈夫！



6 終わりに

本研究は実践の過程であるため、はっきりとした成果と課題は報告できない。しかし、7月に行った授業後には、落語の本を読む子が増えただけでなく、いろいろな分野の本を読む児童が増えた。また、「アドバイスをもらって、もっとうまくなる方法がわかった。」「ほめてくれたから、やる気が出た。」「知らないことを教えてくれて、もっと知りたくなった。」などと意欲に対する感想が多く書かれており、図書館司書の専門性を生かすことができたと考えられる。

11月には、2年生と6年生において、図書館司書との連携した研究授業を行う予定である。今後は、学校だけでなく地域、家庭と連携した取り組みを計画していくことが必要である。

(文責 古谷 智爾)

長期研修生の活動

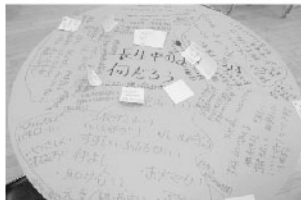


＜学校・学年・学級経営＞
長生村立長生中学校
重 栖 充 暁 教 諭

資質・能力を高める効果的な校内研修の在り方
～全国の教員等育成指標の考察から～

変化の激しい時代において、教員は個々の資質・能力の向上のためにどのように学んでいけばよいのだろうか。教員の学びの道標として教員等育成指標が策定され、今後は指標を基にした校内研修のより一層の充実が求められる。自主経営（セルフマネジメント）の視点から、①えんたくんボードを活用したニーズの掘り起こし、②ブレインライティングによる企画、③ワークショップ型研修の実施と、3回の校内研修を行った。「校内研修の良さ」と、「校内研修で身につく資質・能力」は何なのかを追求・提言していきたい。

9月19日の長生教育研究集会では、アンケートにご協力いただき誠にありがとうございました。



を述べる単元学習を通して、自分の考えの根拠を示しながら話すことのできる児童の育成をめざした。

その結果、メタ認知を働かせて話し合いをモニタリングすることや社会の出来事を多角的に捉えて話し合うこと、相手に応じて説得的に話すことができるようになった。



＜特別支援教育（情緒障害）＞
茂原市立東郷小学校
野 村 隆 之 教 諭

特別な支援を必要とする児童が主体的に学ぶための運動指導についての事例研究

～ムーブメント教育を生かした運動プログラムを通して～

特別な支援を必要とする児童が主体的に学習に取り組むために効果的な運動プログラムの研究を行った。動きの楽しさを通して児童の「こころ、からだ、あたま」を総合的に発達させるムーブメント教育の考え方を取り入れた。運動プログラムを実施することで、これまで学習に対して集中が続かなかった児童が、自分から学習に取り組む姿勢が身についた。また、友達と協力する、教師に質問をするといった、人間関係を築こうとする姿も確認することができた。



＜国語科＞
茂原市立茂原小学校
木 村 大 樹 教 諭

根拠をもって計画的に話し合うことのできる児童の育成

「話し合い記録」と「台本型手引き」の活用を通して「話し合い」におけるメタ認知能力の向上をめざした。また、新聞記事に対して意見を述べるスピーチ活動や、社会に目を向け、複数の資料をもとにして自分の考え

教育功 労 表 彰

○秋の叙勲 瑞宝 双光章 三橋 一康
瑞宝 双光章 山田 禮

○千葉県教育功労者表彰
（教育行政の部）
白子町教育委員会 教育長 牧野 敬一
（学校教育の部 個人の部）
茂原市立茂原小学校 校長 中村 祥一
茂原市立東中学校 校長 鶴澤 智

（学校教育の部 団体の部）
茂原市立茂原中学校

○茂原市教育功労者表彰
茂原市立茂原小学校 校長 中村 祥一
茂原市立東中学校 校長 鶴澤 智
茂原市立富士見中学校 校長 御園 正二
茂原市立南中学校 校長 片岡 正直
茂原市立本納中学校 校長 古山 茂和

茂原市立豊田小学校 教 頭 青木 寛幸
茂原市立西小学校 教 頭 須賀 寿
茂原市立早野中学校 教 頭 伊藤 勝美
茂原市立東郷小学校 教 諭 井桁 明子
茂原市立西小学校 教 諭 神明 正子
茂原市立西小学校 教 諭 高山 秀樹
茂原市立緑ヶ丘小学校 養護教諭 柴崎 朝子
茂原市立南中学校 教 諭 鎗田 美幸
茂原市立南中学校 教 諭 米倉 香代子
茂原市立本納中学校 教 諭 石原 眞弓
茂原市立本納中学校 教 諭 蒔田 久美子
茂原市立早野中学校 教 諭 足立 雅巳
茂原市立西陵中学校 教 諭 鶴澤 美恵

掲載順につきましては、順不同とさせていただきます。
(敬称略)